【研究ノート】

多文化共生社会を目指す取組みとしての ヒューマンライブラリー
－市民活動としてのヒューマンライブラリー実践報告－

宮 崎 聖 乃

The Human Library as an Initiative for a Multicultural Symbiotic Society: Citizen-Centered Human Library Action Report

MIYAZAKI Kiyono

Abstract

The “Human Library” has emerged as a leading global method to reduce prejudices and encourage understanding in communities through dialogue and interaction. Since the first Human Library was held in Copenhagen, Denmark in 2000, similar events have spread around the world. In Japan, most Human Library events are organized by universities, but in 2013, the Human Library Nagasaki Committee began coordinating Citizen-Centered Human Libraries, holding its third event in August 2014. This paper reviews the Human Library concept and reports on recent developments with Citizen-Centered Human Library events in Nagasaki.

キーワード：ヒューマンライブラリー　多文化共生社会　市民活動

１．はじめに

本来私たちの社会は、多様性に富んでいる。さまざまな価値観、文化、生き方の人々によって作られ、成り立っている。しかしながら、これらは時としてぶつかり合い、摩擦を生み、自分こそがマジョリティであるという思いは、差別や偏見として表出する。これは、私たち自身が、私たちの社会の多様性に無自覚であるからではないだろうか。社会を構成する私たち自身が、私たちの社会の多様性に気づくこと、マジョリティもマイノリティも関係なく、私たちの社会がさまざまな人々によって作られていることに気づくことが、多様性に対して開かれた社会、多文化共生社会への第一歩ではないだろうか。

本稿ではこの「私たちの身近な社会の多様性に気づく」ための取組みとして、「ヒューマンライブラリー」を紹介し、2013年から2014年にかけて、筆者が代表を務める市民団体、ヒューマンライブラリー Nagasaki 実行委員会（以下 HLN 実行委員会と記す）によって長崎市において開催された「ヒューマンライブラリー Nagasaki」について報告したい。

なお第２回以降のヒューマンライブラリー Nagasaki はデンマークの Human Library Organization の承認を受けたものである。

2．ヒューマンライブラリーとは

2．1　ヒューマンライブラリーの始まりと広がり

ヒューマンライブラリーとは、リビングライブラリーとも呼ばれ、その名の通り生きている人間を「本」に見立て、図書館で本を読むように、「本」の語りを聞き、対話することによって理解を深める試みである。

身体的ハンディキャップを持つ人、LGBT(注1)、難民、イスラム教徒など、ある社会において少数派であり、そのために誤解や偏見、差別の対象となりやすい人々が「本」となり、会場に集まった人々（読者）に貸し出される。「読者」と「本」は同じテーブルに着き、一定の時間、対話をし、理解を深める。ヒューマンライブラリーの当日の流れは、主催者によってさまざまであるが、大まかな流れは以下の通りである。

1）会場に数人から数十人の「本」が集まる。

2）来場した一般参加者（「読者」）はブックリスト（後述）を見て、自分の読みたい本を選び予約する。

3）セッション（対話）を行う。この際、「読者」は1人から3人程度の少人数である。

4）2）3）を繰り返す。「読者」は数冊の「本」を読むことができる。

Human Library Organizationのホームページによると（http://humanlibrary.org/2014年9月20日最終閲覧）、この取組みは2000年にデンマークのコペンハーゲンにおいて、“Stop the Violence”というNGOがロックフェスティバル会場で開催したのが始まりである。「対話を進め、理解を深めることによって、暴力をなくそう」という思いから始まったこの取組みは、その後、“The Human Library organization”が組織され、ヨーロッパ中心に世界中に広がった。（なお旧称は「リビングライブラリー」であったが、Human Library Organizationのホームページによると2010年に「ヒューマンライブラリー」と改称されているため、本稿では「ヒューマンライブラリー」の名称を使用する。）

駒沢大学文学部社会学科坪井ゼミ（2012：16）によるとヒューマンライブラリーは2011年9月時点で60カ国以上で開催されている。なかでもオーストラリアには、国が資金的サポートを行い、定期的に開催されているヒューマンライブラリーがあった(注2)。アジアでは2008年京都での開催が初となり、その後、韓国、タイ、中国、香港、インド、マレーシア、フィリピンなどで開催され、2014年1月には、タイにおいて“International Forum on Human Library development in the ASEAN”が開催された。

2．2　日本におけるヒューマンライブラリー

日本での開催は前述の通り2008年6月京都において行われたATACカンファレンス2008の中でリビングライブラリージャパンによって開催されたものが最初である。リビングライブラリージャパンはその後も年2回ほど定期的に開催していたが、2014年現在、ホームページは閉鎖され、ここ2, 3年開催していないようである。

現在日本では駒沢大学坪井ゼミ、獨協大学工藤ゼミ、明治大学横田ゼミがほぼ定期的に開催している他、学生有志による開催（青山学院大学学生有志、札幌市立大学有志など）、市民団体や地域のボランティアセンターなどによる開催があるが、その実数を把握することは難しい。

日本におけるヒューマンライブラリーについては、大学主導のものが多く、市民活動としてのヒュー

マンライブラリーは、開催されているとしてもその報告例が少ない。しかしながら、多文化共生社会実現への取組みとして、地域住民自身が行うヒューマンライブラリーは、開催し検証する価値のあるものではないだろうか。いずれにしてもヒューマンライブラリーそのものについての先行研究も少なく、効果などについて一層の研究が待たれるところである。

3．ヒューマンライブラリー Nagasaki の取組み

3．1　開催まで

HLN 実行委員会は、九州初となるヒューマンライブラリーを開催、継続して運営するために、2013年３月、NPO いろは塾のメンバーを中心として結成された。NPO いろは塾は、もともと日本語教師が中心の団体であり、長崎市を中心に異文化理解のためのイベントや語学教師のための研修などの活動を行っていたが、代表である筆者が、2012年日本語教育学会教師研修として行われたヒューマンライブラリー研修に参加したことをきっかけに、長崎におけるヒューマンライブラリー開催に向けて準備を始め、日本語教師に限らず、広くさまざまな人々に計画に参加してもらうために、実行委員会を組織することになった。この実行委員会は、いろは塾の会員、いろは塾会員以外の運営スタッフ、ヒューマンライブラリーの「本」で組織されており、会員は日本語教師、会社員、自営業、主婦、学生などさまざまである。

第１回ヒューマンライブラリー Nagasaki は2013年８月24日長崎市勤労福祉会館にて開催されたが、HLN 実行委員会はこの開催に先立ち、月一度の定例会の他、４回の勉強会と３回の会員向け小規模ヒューマンライブラリーを行った。

１回目の小規模ヒューマンライブラリーは、２名の「本」（イスラム教徒、義足生活者）と筆者の他４名の「読者」で開かれ、２回目は４名の「本」、３回目は５名の「本」と少しずつその規模を大きくしていった。この会員向け小規模ヒューマンライブラリーは、非常に小さなものであったが、実際のヒューマンライブラリー Nagasaki の開催のために果たした役割は大きく、この段階なくしては、開催は不可能であったと思われる。この小規模ヒューマンライブラリーの果たした役割は大きく次の３つである。

第一に、体験してみることができたことである。実行委員会を組織したものの、実際のヒューマンライブラリーに参加した経験があったのは、筆者のみであり、いくら勉強会を開き、研修を行っても、その実際を「感じて」もらうことは難しい。また長崎はもちろん近隣の県などでもヒューマンライブラリーの開催はない。この小規模ヒューマンライブラリーを行うまで、会員の中に「対話がうまく進むのか」「そもそも何らかの成果が得られるのか」といった声もあった。この小規模ヒューマンライブラリーは、会員にまず体験してもらうことを目的としたが、回を重ねるうちに、会員の中で、さまざまな困難や解決すべき課題はあるにしても、やってみる価値のある取組みであるという意識が固まっていったと思われる。

第二に、「本」探し、「本」のプロデュースの経験となったことである。ヒューマンライブラリーにおいて「本」を探すこと、「本」になってほしい人に参加をお願いし、信頼関係を築き、「本」の最初の読者となって、「本」の語りを引き出していくことは、主催者の大きな役割であり、また最も困難だが、やりがいのあることである。この過程を小規模ヒューマンライブラリーの回を重ねることによって、筆者を含め、主催側である HLN 実行委員会の会員は繰り返し経験することができた。

第三に「本」との繋がりが強くなったことである。最初に「本」となった２名の方たちのうち１名の方は、その後もずっと「本」として参加し、１名は海外へ転出したが、その後も支援者として、毎回のヒューマンライブラリーにコメントを寄せてくれている。この小規模ヒューマンライブラリーに参加した「本」の多くは、その後のヒューマンライブラリーにも計画段階から参加し、また積極的に広報にも携わっている。「本」となった人たちが、開催当日だけのゲストではなく、主催者としての役割も果たすというヒューマンライブラリーのあり方は、ヒューマンリブラリー Nagasaki の大きな特長のひとつとなった。

また、この開催準備期間中に、長崎県福祉協議会「ふれあいのあるまちづくり県民運動　ボランティア活動振興・助成事業」に助成金の申請を行い、2014年度２回のヒューマンライブラリー開催に向けて20万円の助成金を受けることができたことは、初めて開催するにあたり、目的意識、社会的意義の再認識といった意味で、資金的援助以上のものとなった。

以下は第１回ヒューマンライブラリー Nagasaki の開催までの準備を時系列にまとめたものである。

・実行委員を対象とした勉強会等の開催
2013年２月22日　第１回勉強会「心理学的側面から見た HL の効果について」
2013年３月30日　第１回小規模 HL
参加者「本」：２名（イスラム女性／義足生活者）
　「読者」：５名（実行委員）
2013年４月４日　第１回小規模 HL 振り返り
2013年５月13日　第２回勉強会「効果的な HL のために」
2013年６月８日　第２回小規模 HL
参加者「本」：４名（イスラム女性／性同一性障害／パステルアーティスト／造形遊び指導者）
　「読者」：12名（実行委員５名、外部参加７名）および長崎新聞からの取材
2013年７月６日　第３回勉強会「HL 実施計画①全体計画」
2013年７月27日　第３回小規模 HL
参加者「本」：４名（イスラム女性／性同一性障害／パステルアーティスト／義足生活）
　「読者」：９名（外部からの参加）、実行委員はスタッフとして参加
2013年８月２日　第４回勉強会「HL 実施計画②資料作成」
2013年８月13日　最終打ち合わせ

・広報（ポスター、チラシ、Facebook）
ポスター、チラシを作成し以下のところに配布、掲示を依頼した。
国際交流教会、県民ボランティア活動支援センター、市内の大学、公民館、飲食店等実行委員による配布
Facebook に Human Library Nagasaki のページ及び実行委員の連絡、打ち合わせ用にグループを作成

・助成金の申請

2013年１月31日　2013年度のヒューマンライブラリー Nagasaki（第１回、第２回）の開催のために長崎県社会福祉協議会「ふれあいのあるまちづくり県民運動　ボランティア活動振興・助成事業」へ助成金を申請した。

2013年３月31日　申請が認められ20万円の助成が決定

2013年10月31日　中間報告書提出

３．２　ブックリスト、利用規則、同意書について

ヒューマンライブラリーの開催にあたり、当日配布資料として、ブックリスト、利用規則、同意書を準備した。

ブックリスト

ヒューマンライブラリー Nagasaki では、参加者（「読者」）は事前予約ではなく、当日会場において、自分が読みたい「本」を選ぶというやり方を採用した。そのため、当日会場で、参加する「本」のブックリストを配布した。ブックリストの内容は、作者名、タイトル、あらすじで構成されており、「読者」はこれを読んで、自分の読みたい本を決める。

以下は、最も多くの「本」が参加した第３回のブックリストである。

表１　第３回ヒューマンライブラリー Nagasaki ブックリスト

1	義足生活者	足を失った日から	事故で足を失った日から今日まで… 五体不満足になるということ。困難や葛藤。さまざまな感情。 どんな風に考え生きてきたかを赤裸々に語ります。 皆さまのご質問にもお答えしたいと思いますので、疑問に思うことは是非聞いて下さい。
2	性同一性障害	恐怖の就活?!私ってつくづく強運の持ち主!!	教育実習生に恋した小学生。将来は1人 だと悟った中学生。理解者はこの人だけだと思った高校生。大学生…あぁ…向かい合えば向かい合うほど辛かった思春期・・・でも、慣れました。（笑）今、やっと自分のこと好きになれました。これからも、問題は山積みですがもう何でも来いです！社会人の私、超無敵です！！
3	中途失明者	お先真っ白	もしかして、目の見えない世界は真っ黒だと思い込んでいませんか？実は真っ白な、乳白色まみれだった失明後の世界。 15歳の２月、高校への進学が決まった２週間後。視力がほぼ０に落ち込み、じわりじわりと世界が白に埋め尽くされていき、18歳の５月か６月に漸く失明したことに気が付いた、そんなどこにでもあるようなありふれたお話を。よろしければお聞きください。
4	元ショーパブダンサー（ニューハーフ）	ありのままに生きること	自らを否定しながら過ごした青春期。心のバランスが上手く取れなくなり、自分が自分であるために故郷を逃げ出す事を決意した２５歳。しかし飛び込んだ世界はまるで異世界。無我夢中で乗り越えた新人時代。演じる喜びを知った全盛期。演者から作り手に関わり、価値観が変わった３０代後半。平凡に憧れながら、非凡に生きた４０年を読んで頂けたら嬉しいです。
5	セクシュアルマイノリティ	Over　The　Rainbow	現在、私は仕事の傍ら、「Take it！虹」と「FRENS」という、二つの団体に所属し、セクシュアルマイノリティに関心を抱く方を対象とした交流会や講演会・シンポジウム等を行っています。セクシュアリティという「性を含めた生全般に関連するアイデンティティ」、の話を主軸に最終的には、セクシュアリティを超えて、『すべての人が心地いい社会』を目指して、みなさまとともに考えていくきっかけになれば幸いです。
6	イクメン	仕事＋家事＋育児＝育自	14年前に長崎に来て、自分でゴハンを作ったり子どもと積極的に関わることは、どうも少数派だと気付かされました。取り合えず正しい父親を目指しましたが疲れたので、楽しい父親にシフトチェンジして子どもも仕事もボランティア活動もエンジョイしてます。 育メンズ倶楽部ながさきは子どもをダシにして父親が楽しむ場です（個人的解釈）。
7	ベトナム人シスター	神の導きと人との出会い	私はベトナム出身。二十歳の時来日。神の愛を人々に伝えたくて、修道者になる道を選んだ。日本での生活をどのように送っているのか、また自分の国と日本の文化、習慣、考え等の違いをどうやって乗り越えてシスターになったのか。人生のいろいろな味を体験しながら神と人との出会いがどうやって自分を成長させてくれたのかを皆さんと一緒に分かち合いたいと思います。
8	見た目問題当事者(やけど)	外に出るのが怖い?!	20代半ばにやけどをして、入院から自宅療養へ。顔にやけどして見た目が変わり外に出られない、もう、人に会えないと思っていた私が何がきっかけで人前にでられるようになったか？おそるおそる出かけていくようになって気がついたことなど。 きっかけになった一つの出来事をお話します。
9	シングル介護者	ひとりで親を介護する仕事と介護、変わる家族のかたち突然始まる介護が私の人生にもたらすもの	シングルマザーとして子どもを育てながら正社員で働いていた私は、父親が倒れたことで、気が付けば介護者になっていました。仕事と介護の両立や弱っていく親との関わりに戸惑い、誰にも相談できぬまま、一人追い込まれていくようでした。公的な制度や病院、介護施設なども、知れば知るほど「介護者の味方は誰なのか？」と疑問を抱くばかり。そんな中で立ち上げた「介護者の交流会」がひとすじの灯りとなりました。

このブックリストは左から作者名、タイトル、あらすじの順で記されているが、いずれも「本」となった人たち自身が書いたものである。主催者と「本」となる人は何度も話し合い、ヒューマンライブラリーで「本」が語る内容や、ブックリストへの記載を決めていく。

十分な話し合いややり取りの後で、ブックリストの作成に取りかかれることが、理想ではあるが、実際にやっていく上では、ブックリストの作成という作業が、「読者」の目を意識しつつ、「本」の語りの中心を明確にしていくという作業となり、「本」の自身が語りの意識化していく上で大いに役立ったと思う。

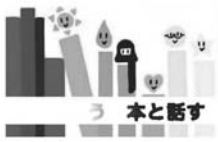
利用規則／同意書

ヒューマンライブラリーに開催に向けては、いくつかの利用規則を明確にしておく必要があった。これは、「本」の人権に最大に配慮しつつ対話を深めてもらうためである。

個人情報の厳守の他に、「本」が話したくないと感じたら、理由を説明することなくセッション（「本」と「読者」の対話の時間）を中止することができるという一項を設けた。これは「本を守る」「本を傷つけない」ということが、一般の図書館と同じくヒューマンライブラリーでも大原則とされているからである。

ヒューマンライブラリー Nagasaki では、具体的な利用手順を示した利用案内とともに、この利用規則を開催時に配布し、第２回、３回においては同意書を付し、署名をいただいた後、回収した。これは「読者」となる人々が、第１回目においては実行委員や「本」の友人、知人であったのに対して、２、３回目が広報、メディアでの紹介などにより拡大したからである。

以下は、第３回ヒューマンライブラリー Nagasaki にて配布したものである。



ヒューマンライブラリーNagasaki　実行委員会

ヒューマンライブラリー利用案内

ヒューマンライブラリーは人を本になぞらえ、図書館で本を読むように、様々な人と積極的に対話し、理解を深める取り組みです。ヒューマンライブラリーNagasaki 実行委員会は NPO いろは塾が主体となって、長崎で九州初となるヒューマンライブラリーを開催するために 2013 年3 月に組織され、現在に至っています。

ヒューマンライブラリーの流れ

1. ブックリストをご覧になって、読みたい本を１冊予約してください。
   今回の開催では９人の「本」の方が参加します。１冊の本に対する読者は 1～最大３人までです。ご希望に添えない場合があるかもしれませんが、どうかご了承ください。
2. テーブルについて、読書（対話）を楽しんでください。
   読書時間は３０分です。話足りないかもしれませんが、速やかに終了してください。
3. 次の本を予約してください。
   今回は５回の読書時間を設ける予定ですので、最多で５冊の本を読むことができます。
4. 全ての読書が終わったら、アンケートに記入してスタッフにお渡しください。

ヒューマンライブラリー利用規則

- 本への質問など、積極的にコミュニケーションをとっていただいてかまいません。しかし、故意に相手を傷つける質問や発言をするなどの行為はしないで下さい。
- 本の皆さんは、それぞれの分野の代表として参加されているのではなく、一個人として体験を話し、読者の皆さんも一個人として対話をしていることを忘れないでください。
- 本の方がもし途中で気分が悪くなった場合や、これ以上話し続けたくない気持ちになった場合は、その場で理由を説明することなく読書を中止することがあります。あらかじめご了承ください。
- 個人情報保護の観点から、読書内容の録音・録画・写真撮影・知りえた情報のネット上での個人的な公開を禁じます。

上記をよくお読みになり、ご同意いただけましたら、下の同意書にご署名の上、スタッフにお渡しください。みなさまの個人情報はヒューマンライブラリー**Nagasaki** の運営以外の目的では一切使用致しません。

ヒューマンライブラリーの利用規則に同意し、遵守します。

年　　月　　日　　お名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご住所 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＊　次回ヒューマンライブラリーのご案内をご希望の方はメールアドレスをご記入ください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿@＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

これらの資料作成にあたっては、前述の駒沢大学坪井ゼミ、獨協大学工藤ゼミ、明治大学横田ゼミが開催したヒューマンライブラリーでの配布資料、報告書、文献などを基に作成し、改変を行った。

3．3　ヒューマンライブラリー Nagasaki 開催

ヒューマンライブラリー Nagasaki はこれまで以下の３回開催された。

第１回　2013年８月24日　長崎県勤労福祉会館

第２回　2014年２月23日　長崎松が枝国際ターミナル

第３回　2014年８月30日　長崎松が枝国際ターミナル

以下ではこの３回の開催について、場所、「本」、スケジュール及びセッション、「読者」の４点から考察をまじえつつ述べたい。

3．3．1　場所

ヒューマンライブラリー Nagasaki は、第２回から場所を移している。第１回は公共の施設の会議室を複数借り、パーティションを使ってブースに区切り、セッションの場とした。しかしながら、この方法について、「パーティションを使っても周りの声が聞こえ、話しづらかった」などの意見が聞かれた。「本」と「読者」のプライバシーに配慮し、この方法を採用したが、「本」からも、個々のセッションへのよりも、開催全体への配慮が効果的であるとの意見も出たために、第２回より松が枝国際ターミナルに場所を移すとともに、パーティションを使わないオープンスタイルで開催した。これに

伴い「読者」に前述の同意書の提出を義務づけることとした。

写真１　第１回ヒューマンライブラリー

写真２　第２回ヒューマンライブラリー

松が枝国際ターミナルは2010年にオープンしたばかりの国際観光船のターミナルであり、非常に広く開放的な雰囲気で、「本」にも「読者」にも好評であった。「自分の話は受け止めてもらえるのか」「深刻な話を聞くに違いない」と緊張して臨みがちな両者にとって、開催場所の選択は重要なポイントであることを実感した。もちろん主催者側にとっても、一目で会場の状況が把握できる場所での開催は、スムーズな運営を行う上で効果的であった。

３．３．２　「本」

３回の開催で参加した「本」は以下の通りである。

第１回　８人

シングル介護者、義足生活者、性同一性障害、イスラム教徒、在長崎外国人、セクシャルマイノリティ、造形遊び主催者、パステルアーティスト

第２回　６人

シングル介護者、義足生活者、性同一性障害、在長崎外国人、中途失明者、ニューハーフ

第３回　９人

シングル介護者、義足生活者、性同一性障害、中途失明者、ニューハーフ、イクメン、ベトナム人シスター、見た目問題当事者（やけど）、セクシャルマイノリティ

（呼称はいずれも「本」自身によるもの）

ヒューマンライブラリーにおける「本」は、社会において少数派であり、そのために誤解や偏見、差別の対象となりやすい人々、生きづらさを抱えている人々であることが多いが、ヒューマンライブラリー Nagasaki では、これに限らず、「身近な社会に暮らすいろいろな人たち」という観点から、「本」を集めた。これはひとつには、さまざまな人をカテゴライズすることは不可能であると考えたからでもある。

身体的な障害を持つ人や、LGBT は生きづらさを抱えている人であるかもしれないが、一方である生き方を選び実践している人であるかもしれない。同様にイスラム教徒やシングル介護者は、望むと望まざるとに関わらず、ある生き方を選択し、それ故にある社会においては少数派となり、生きづら

さを抱えているかもしれない。

このような思いから、HLN 実行委員会では、ともあれ話を聞いてみたいと思う人を「本」として推薦し、ヒューマンライブラリーへの参加をお願いした。「本」の名前だけでは、どういった人なのかわかりにくいかもしれないが、詳しくは参考資料のブックリストを参照されたい。

３．３．３　スケジュール及びセッション

第１回の開催では、昼休みを挟んで午前午後それぞれ２回のセッションを行った。しかし、このスケジュールでは、「本」、「読者」ともに拘束時間が長くなるため、多くの「読者」が午前か午後のどちらかのみの参加となった。なるべく多くの「本」との時間を提供すべく、第２回以降は午後のみの開催とし、セッション数は第２回で３回、第３回で５回とした。

第１回、２回の開催では、「本」の予約は、イベント開始と同時にその日読みたい本を全て予約するという方法をとった。しかし、この結果、第２回では１人の本に対し、最大５人の「読者」という事態になった。これは全ての「読者」が、希望する全てのセッション（多くは３回全部）に参加できるようにと配慮した結果でもあるが、「読者」の数が多い場合、「読者」同士も初対面であるため発言しにくくなりがちであり、また「本」との対話になりにくい。この取組みの「対話を通じて互いの理解を深める」という目的に沿うため、第３回からは、１セッションにつき「読者」３人までという制限を設けることとし、「本」の予約もセッションごとに行うこととした。そして、「読者」がなるべく多くのセッションに参加できるよう、セッション数を５回と多く設定した。

第３回は、「本」の数９人に対し参加した「読者」の数27人と、偶然ながら理想的なバランスで開催できたため、全てのセッションが「読者」１人から３人で行え、かつ待ち時間を持て余す人も見かけられなかった。しかし今後、参加者が増えてくれば、待ち時間の有効な活用法も考えていく必要がある。

３．３．４　「読者」

「読者」としての参加人数は、第１回は24人、第２回24人、第３回は27人であった。しかし、その内訳は手探りで開催した第１回が、スタッフや「本」の知人がほとんどであったのに対し、第２回、３回と回を重ねるごとに、一般の参加者が増えていった。これは一つには第２回の前後に、新聞、ラジオ、ケーブルテレビなどの取材があり、広報に役立ったためと思われる。

第１回目は、前述の通り、「読者」に主催者の知人が多かったため、アンケート調査は主に感想を尋ねるものであったが、第２回、３回目については「読者」の属性についての質問も行った。結果は以下の通りである。

第２回ヒューマンライブラリー Nagasaki「読者」

年齢層	10～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～	男女別合計
男性	0	0	1	0	0	1	0	2
女性	3	3	5	8	1	1	1	22
年代別合計	3	3	6	9	1	2	1	

第３回ヒューマンライブラリー Nagasaki「読者」

年齢層	10～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～	男女別合計
男性	1	3	1	2	0	0	0	7
女性	5	4	2	9	0	0	0	20
年齢別合計	6	7	3	11	0	0	0	

ともに40代の参加が多いのは主催側の年齢層とも一致しており、主催者の知人の参加が多かったためであるが、全体として１人での参加が少なく、２、３人での参加が多かったたことが回ごとの年齢層の偏りに影響しているかもしれない。しかしながら、第３回においては、10代、20代の参加が増え、27名中10名が高校生、大学生であったことは、これからの多文化共生社会を考える上で、主催側にとって大変嬉しいことであった。

また、第２回と３回では、「本」や「本と対話すること」に対する「読者」の認識や気持ちが、「本」とのセッションによって、どう変わったのかあるいは変わらなかったのかを知るため、「本」やセッションに対する気持ちを問う質問を行った。セッションの開始前と最終セッション後に、「好奇心」「期待感」「同情」「不安」「怖い」「嫌悪」「好意」「親近感／共感」の８つの選択肢からの当てはまるものをいくつでも選択してもらい、当てはまるものがない場合は、「その他」として自由記述を行ってもらうというものである。以下は結果をまとめたものである。

第２回ヒューマンライブラリー Nagasaki「読者」アンケート

	セッション前		セッション後	
	有効回答用紙数24		有効回答用紙数22	
	回答数	%	回答数	%
好奇心	14	58.3	5	22.7
期待感	15	62.5	3	13.6
同情	0	0	0	0
不安	2	8.3	0	0
怖い	0	0	0	0
嫌悪	0	0	0	0
好意	5	20.8	10	45.5
親近感／共感	9	37.5	18	81.8

第３回ヒューマンライブラリー Nagasaki「読者」アンケート

	セッション前		セッション後	
	有効回答用紙数26		有効回答用紙数27	
	回答数	%	回答数	%
好奇心	14	53.8	5	18.5
期待感	12	46.2	4	14.8
同情	0	0	2	7.4
不安	4	15.4	0	0
怖い	0	0	0	0
嫌悪	0	0	0	0
好意	2	7.7	10	37
親近感／共感	7	26.9	19	70.4

どちらの回においても参加者の何割かはセッション前から、「本」に対して「好意」や「親近感／共感」といったポジティブな感情を持っていたことがわかるが、どちらの回においても、セッション

後には「親近感／共感」を持った人がセッション前の２倍以上に増えていることがわかる。また、ヒューマンライブラリーに参加した最大の理由と考えられる「好奇心」という回答が、セッション終了後にも見られるのは、まだ読んでいない「本」に対する好奇心や、期待感と考えることができるかもしれない。セッション後のアンケートでは、「読者」の９割近くが自由記述による感想を述べている。以下はその抜粋である。

- 価値について改めて考えさせられた。考え方次第で楽になるとおもった。本当に勉強になった。（30代男性）
- いろんなことに気づきました。お話を聞けて良かったです。（40代女性）
- 本を通して自分自身を見つめ直し、自分が考えていること、感じていることを新たな視点で見つめることができ、とてもよい影響を受けました。本の方々の発信する意識が自分の奥底に眠っている意識を呼び起こしてくれました。ありがとうございました。（30代女性）
- 子どもたちにも聞かせたいです。もっと頻回開催して欲しいです。（中学校教諭、40代女性）
- 「性同一性障害」に対する考え方が変わった。いろいろな悩みを抱えて生活してきた人がいるということを改めて実感した。（学生20代女性）
- 人にはいろんな事情があって当然ということも再確認しました。私の周りの友人とかにも来てほしいと感じました。（学生20代女性）
- なかなか普段は聞けないような貴重なお話を聞くことができ、勉強になりました。（学生10代女性）
- イクメンの方のお話を聞いて、今の社会のありようを学ぶことができました。２人の本を読んでみていろんな事情を抱える人々がたくさんいることを知ることができ、頑張って生きているということが感じられて、勇気をもらいました。（学生10代女性）
- お二人の「本」を聞かせていただきました。まわりの目（差別）がマイノリティの自己否定につながっていると思いました。考えさせられました。（40代男性）
- 自分の立場と同じ人の話が聞けて自分の生活と共通点があり、役に立つ意見を聞くことができました。（20代男性）
- 共感をえたことでアドバイスをいただいたりし、とても勉強になりました。またこのようなイベントがあったら参加したいです。（20代男性）
- 今まで自分が思っていたイメージとは違い、印象が変わった。（学生20代男性）
- 自分とはずいぶん違う方の話だったので、今までにない感覚や納得感があった。（学生10代男性）
- 話す、知り合うことのなかった人たちと近づけて今までモヤッとしていた事が少しだけ晴れた気がします。とても強い人たちだと（いろんなことを乗り越えて自分より強い人）だと思っていたけど、弱い気持ちもそのまま持っていて、自分と変わらないんだと、親近感がわきました。（40代女性）
- 本日のテーマのように何度もでて来たワードが「見えないカベを作るのは自分」「かきねを作っていた」自分について色々考えさせられる時間でした。（40代女性）

３．４　ヒューマンライブラリー Nagasaki 第３回までを終えて

半年に１回ペースで開催してきたヒューマンライブラリー Nagasaki の第３回目を終えて、「読者」アンケート結果などから、目標としていた多様性への「気づき」以上の、歩み寄りや理解が生まれたのではないかと思われる。また、少しずつではあるが「本」も「読者」も県外からの参加が増えつつ

あり、この取組みへの認知度と理解の広がり示していると思われる。

また「本」と主催者の交流も生まれ、その中で「本」の自己開示の過程や、変化などを身近に感じることができた。また「本」が主体的に関わり、時として主催者側として運営にも参加したり、あるいは「読者」となったり、「読者」として参加した人が、次の回では主催者側や「本」として参加するなど、ヒューマンライブラリーへのかかわり合い方が自由な広がりを見せていることもヒューマンライブラリー Nagasaki の特長になった。どのような立場で参加するかという枠が固定されず、さまざまな形で関わっていくことができることは、いろいろな人たちのこの取組みへ参加が広がるということであり、市民活動として取り組んだ成果の一つであると思う。

4．おわりに

本稿では、多文化共生社会実現のための取組みの一つとしてのヒューマンライブラリーを紹介し、市民団体ヒューマンライブラリー Nagasaki 実行委員会によるヒューマンライブラリーの開催について報告したが、だれがどのようなことをどのようにおこなったかという報告に終始し、その成果についての分析、検証などはまだまだ不十分である。現在、「本」についてのインタビューを実施中であるが、「読者」、さらには主催者という三者それぞれの社会心理学的研究を進め、その成果を明らかにしていくことが今後の大きな課題である。

注

1：LGBT Lesbian（レズビアン）Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシャル）、Transgender（トランスジェンダー、性同一性障害）

2：工藤（2012：215）によるとオーストラリア連邦政府からの資金援助はすでに終了している。

資料１：第１回ヒューマンライブラリー Nagasaki ブックリスト　2013年８月24日

	作者名	本のタイトル	あらすじ
1	自宅で開業 （ﾊﾟｽﾃﾙｱｰﾃｨｽﾄ）	親子でパステルアート活動 関わることの大切さを伝えたい	病気や障害を持つ子を出産し、骨髄移植、長男の死、自身の病気、二男のいじめ問題を抱えていたとき、ストレスケア、パステルアートと出会いました。心と体の回復には癒しが必要だと考え、心と体に関する資格を取り、セラピストとなって二男に自らカウンセリングを行いました。その後、自宅サロンを開業し、現在は元気になった二男と一緒に親子で関わることの大切さを伝えるために活動しています。 『逆境はチャンスである』と言えるまでになったプロセスと、親子で自宅開業のことをお話ししたいと思いま
2	シングル介護者	ひとりで親を介護する仕事と介護、変わる家族のかたち。 突然始まる介護が私の人生にもたらすもの	シングルマザーとして子どもを育てながら正社員で働いていた私は、父親が倒れたことで、気が付けば介護者になっていました。仕事と介護の両立や弱っていく親との関わりに戸惑い、誰にも相談できぬまま、一人追い込まれていくようでした。公的な制度や病院、介護施設なども、知れば知るほど「介護者の味方は誰なのか？」と疑問を抱くばかり。そんな中で立ち上げた「介護者の交流会」がひとすじの灯りとなりました。
3	義足生活者	足を失った日から	事故で足を失った日から今日まで… 五体不満足になるということ。 困難や葛藤。さまざまな感情。 どんな風に考え生きてきたかを赤裸々に語ります。 皆さまのご質問にもお答えしたいと思いますので、疑問に思うことは是非聞いて下さい。
4	性同一性障害	わりと、自然体です	教育実習生を好きになった小学生。将来は独りだと悟った中学生。理解者はこの人だけだと思った高校生。隠しきれない大学生。無敵で迎える社会人。乗り越えて乗り越えてここまで来た。一人で生きてきたと勘違いしていた。支えてくれた人に感謝の気持ちを伝えたい。
5	ムスリム （イスラム教徒）	宗教としてのイスラム	１．ムスリム女性の生活スタイル ２．イスラム教徒の食べ物や飲み物のしきたり
6	在長崎外国人	在日韓国人のつぶやき	韓国生まれ、韓国育ち。でも只今人生の３割を日本で送っている最中。穏やかな日々の中、度々自分の立場に悩まされることが起きる。その原因は政治問題だったり、仕事関係だったり、とてつもなく些細なことだったり。学生時代までの自分と社会構成員になってから形成されていく自分は「日本」と「韓国」が混雑していて、一体どっちなんだろう、と毎日が葛藤で矛盾でいっぱいです。そんな私「在日韓国人」のささやかな生活をお話します。
7	セクシュアルマイノリティ （午前のみ）	Over　The　Rainbow	現在、私は仕事の傍ら、「Take it！虹」と「FRENS」という、二つの団体に所属し、セクシュアルマイノリティに関心を抱く方を対象とした交流会や講演会・シンポジウム等を行っています。セクシュアリティという「性を含めた生全般に関連するアイデンティティ」、の話を主軸に最終的には、セクシュアリティを超えて、『すべての人が心地いい社会』を目指して、みなさまとともに考えていくきっかけになれば幸いです。
7	造形遊び主催者 （午後のみ）	「障がいとは、心の豊かさとは…発達障がい児・者との出会いとふれあいの中で、私は変わりました。」	造形あそび教室で子どもや障がい児・者と、絵・工作で楽しく作ってあそんでいます。平成８年に出会った脳性マヒで発達障害の４才男の子。その子が来ると周りは温かく、老若男女に知り合いが多く…びっくり。その魅力と心のふれあいの中で、私も笑顔とピュアな心を取り戻し・・・心から喜べないあなた、一度おしゃべりしてみませんか?出会いを大切に、コツコツゆっくりと子どもたちの可能性を信じ、見守り応援を一緒にしませんか。

資料２：第２回ヒューマンライブラリー Nagasaki ブックリスト　2014年２月23日

	作者名	本のタイトル	あらすじ
1	在長崎外国人	在日韓国人のつぶやき	韓国生まれ、韓国育ち。でも只今人生の３割を日本で送っている最中。穏やかな日々の中、度々自分の立場に悩まされることが起きる。その原因は政治問題だったり、仕事関係だったり、とてつもなく些細なことだったり。学生時代までの自分と社会構成員になってから形成されていく自分は「日本」と「韓国」が混雑していて、一体どっちなんだろう、と毎日が葛藤で矛盾でいっぱいです。そんな私「在日韓国人」のささやかな生活をお話します。
2	シングル介護者	ひとりで親を介護する仕事と介護、変わる家族のかたち突然始まる介護が私の人生にもたらすもの	シングルマザーとして子どもを育てながら正社員で働いていた私は、父親が倒れたことで、気が付けば介護者になっていました。仕事と介護の両立や弱っていく親との関わりに戸惑い、誰にも相談できぬまま、一人追い込まれていくようでした。公的な制度や病院、介護施設なども、知れば知るほど「介護者の味方は誰なのか？」と疑問を抱くばかり。そんな中で立ち上げた「介護者の交流会」がひとすじの灯りとなりました。
3	義足生活者	足を失った日から	事故で足を失った日から今日まで… 五体不満足になるということ。困難や葛藤。さまざまな感情。　どんな風に考え生きてきたかを赤裸々に語ります。 皆さまのご質問にもお答えしたいと思いますので、疑問に思うことは是非聞いて下さい。
4	性同一性障害	わりと、自然体です	教育実習生を好きになった小学生。将来は独りだと悟った中学生。理解者はこの人だけだと思った高校生。隠しきれない大学生。無敵で迎える社会人。乗り越えて乗り越えてここまで来た。一人で生きてきたと勘違いしていた。支えてくれた人に感謝の気持ちを伝えたい。
5	中途失明者	お先真っ白	もしかして、目の見えない世界は真っ黒だと思い込んでいませんか？実は真っ白な、乳白色まみれだった失明後の世界。15歳の２月、高校への進学が決まった２週間後。視力がほぼ０に落ち込み、じわりじわりと世界が白に埋め尽くされていき、18歳の５月か６月に漸く失明したことに気が付いた、そんなどこにでもあるようなありふれたお話を。よろしければお聞きください。
6	元ショーパブダンサー（ニューハーフ）	ありのままに生きること	自らを否定しながら過ごした青春期。心のバランスが上手く取れなくなり、自分が自分であるために故郷を逃げ出す事を決意した２５歳。しかし飛び込んだ世界はまるで異世界。無我夢中で乗り越えた新人時代。演じる喜びを知った全盛期。演者から作り手に関わり、価値観が変わった３０代後半。平凡に憧れながら、非凡に生きた４０年を読んで頂けたら嬉しいです。

【参考文献】

加賀美常美代、横田雅弘、坪井健、工藤和宏（2012）「多文化共生社会の偏見・差別－形成のメカニズムと低減のための教育－」明石書店：150-220

工藤和宏，矢島祐作，本橋由理，榎本佑紀(2012)「多様性と共に生きる：『ヒューマンライブラリー』の運営を通した『社会人基礎力』成長の物語」『独協大学英語研究（71)』：99-118

小林優佳（2011）「リビング・ライブラリーの取組みと公共図書館－コミュニティの『場としての図書館』の視点から－」富山市立図書館ホームページ「研究報告」https://www.library.toyama.toyama.jp/kenkyu/h23　2014年９月20日最終閲覧

駒沢大学文学部社会学科坪井健研究室（2011）「平成22年度社会学科坪井ゼミ（３年）共同研究報告書『共同研究リビングライブラリーの可能性を探る－実践報告：第１回「生きている図書館」駒澤大学2010－』」http://tsuboi.secret.jp/livinglibrary/main.pdf　2014年９月20日最終閲覧

駒沢大学社会学部坪井ゼミ（2012）「ココロのバリアを溶かすヒューマンライブラリー事始め」人間の科学新社

獨協大学外国語学部英語学科工藤和宏ゼミ（2011）「獨協大学ヒューマンライブラリー開催報告書」（2012年10月日本語教育学会教師研修コースにて資料として配布）

南浦涼介、岸本憲一良、岡村吉永（2012）「学生の自発的研修活動に関する基礎的調査（１）」『山口大学教育学部附属教育実践綜合センター研究紀要（33)』：63-68

横田雅弘(2013)「『ヒューマンライブラリー』という図書館」『図書の譜：明治大学図書館紀要(17)』：147-151,

Human Library Organization ホームページ　http://humanlibrary.org/index.html　2014年９月20日最終閲覧

miyazaki@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp